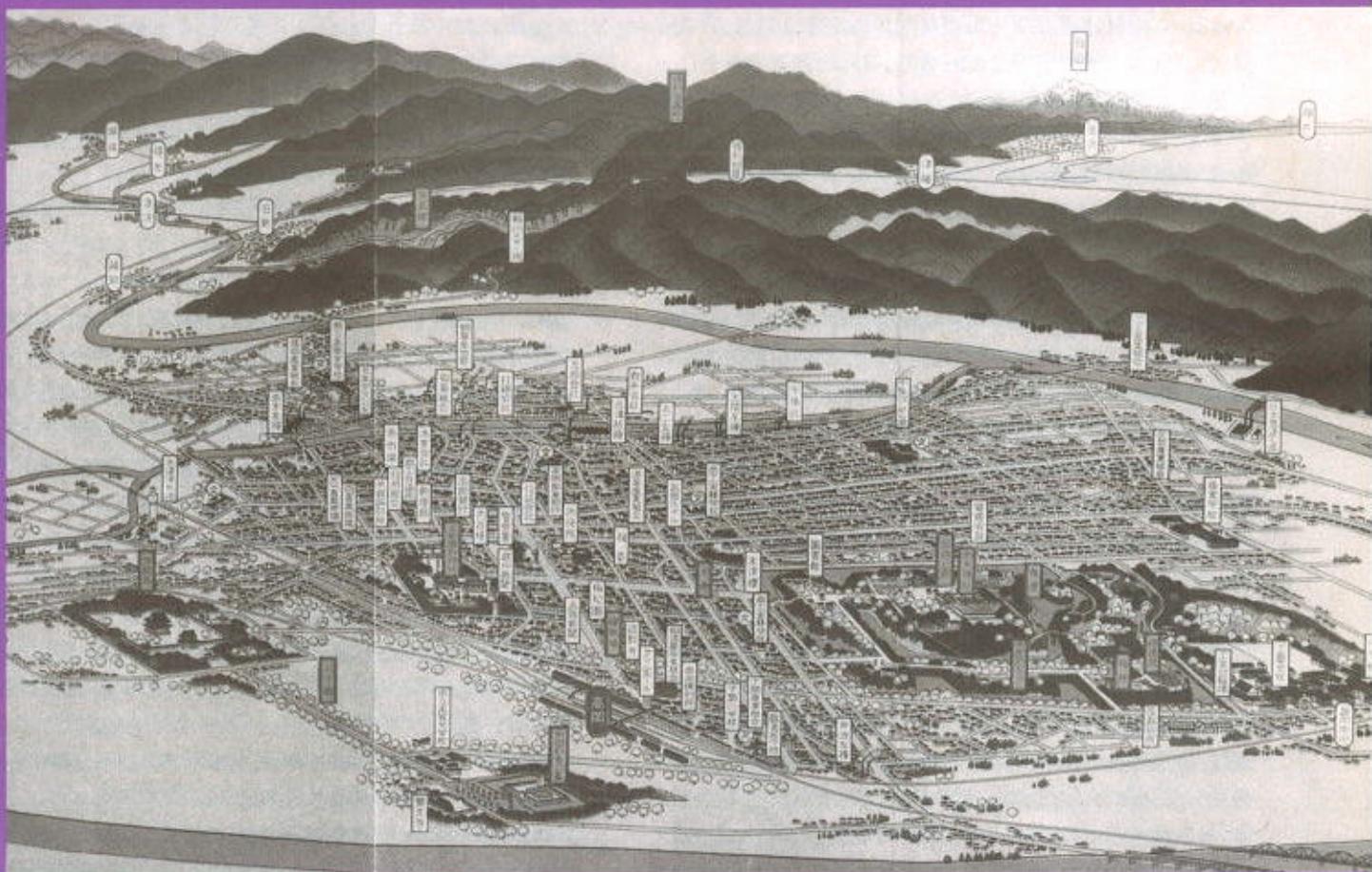


# 博物館だより



高岡市鳥瞰図(部分) 吉田初三郎

## 伏木浦から伏木港へ —伏木資料展によせて—

平成6年9月10日 実施  
講師 古岡英明先生

「伏木」の地名は、天正年間(1573~91)以前の史料には、全く見あたらない。元和元年(1615)伏木浦から佐渡へ13艘の船が出たとの文書がある。「新潟県史」を見ると、天正4年(1576)、放生津・伏木浜に対し、越後の上杉氏が船を準備せよと命じた制札があり、伏木浦の存在がわかる。「伏木浦旧記」では、慶長元年(1596)以前の人家は12戸、慶長17~19年(1612~14)が26戸、寛文3年(1663)35戸、元禄3年(1690)195戸、天明6年(1786)250戸と、伏木村はささやかな浦であった。

伏木の中心部は弘化4年(1847)の地図では小矢部川の河口から離れた現在の本町臥浦地区で、発祥の地ということで、近年順證寺門前に「旧浦町」石碑が建立された。

近世の初期には、高岡築城にともなう物資流通の拠点港として、千保川・小矢部川合流点の木町浦が栄えた。しかし高岡廃城後、転出者が続出し加賀3代藩主前田利常は、町人の転出防止のため足留令を出し、そのかわりに様々な特典を与えた。木町浦を川西七浦の津頭とし、木町を中心に入や物資が動く態勢づくりにつとめた。

一方陸上では、小馬出町から大坪町に向っていた北陸道を、坂下町・定塚町を経て大野に向うよう改めた。また開発・古定塚・閔町など、町周辺の寺院を町の中に移した。市街地に寺院參詣者を集め、旅人を通行させ、武士がないなくても周辺農村から人々が集まり、商業が成り立つように考えた。こうした施策が実を結び始めた頃、庄川の本流河道が変り、木町浦まで大きな船があがれなくなった。そのため木町浦にかかり、享保初年(1720前後)頃から、伏木浦が外海を航行する船の監視、積荷検査の役人常駐の拠点港となり、人・物が集まり、蔵や納屋が立ち並び物流の中心となった。

近世の物流は、ほとんど船によった。陸上の交通路は道幅が1~2間で狭く、藩境ごとの関所や大きな川には橋がなく不便であった。馬一頭の積荷は米2俵が基準で、これを1駄といつた。15駄とは15頭の馬に、15人の口取で30俵の米を運ぶことで、小矢部川を上下する25石積の長船の積荷は25駄に相当し、3人の舟子で運んだ。

遠方への物流の主力は北前船と呼ばれた外海船で、大阪や瀬戸内の人々が、北の方からくる船につけた呼び名である。多くは、弁財船という型の船で、少人数で多量の荷物が運べるきわめて合理的にできた船だといわれている。帆をかけて走り、帆布の筋により5反帆、10反帆などと呼び、その数から船の大きさがわかった。近世初期の外海船の帆は、ほとんどが筵帆で、麻布や木綿布になったのは、近世末期である。

千石船と呼ばれた大型外海船の帆は、縦20m、横幅20m

で、小学校の教室4つの広さの帆であった。帆柱は1本で、直径75cm~1m、高さが23mもあり、帆の上下には滑車を用いた。これを、きわめて少人数の舟子で操作したところが、弁財船の特色である。

弁財船の欠点は甲板がなかったことで、海水が船内に入り積荷が濡れた。2~3ヶ月で建造し、40年間ほど使用した。船喰虫が船底や船腹に穴をあけ、水洩れを起すため、海を走る航期を短くし、長期の停泊の時は川を泊地とした。それで近世には河口の発達がめざましかった。

古府村本江屋間三郎(現秋元家)所持の長寿丸の天保9年(1838)の記録では、伏木浦を起点に、江差・新潟・七尾・備前笠間など各地へ航海している。北前船の航海は1年間2航海が基準で、旧暦の2~3月(現3~4月)に起舟といって帆柱を立て、越中米を積んで大阪に赴き、米をおろし雑貨類を積載し、途中の寄港地で積荷を売買しつつ伏木浦に戻る。次に米や藁工品を積んで東北・北海道方面へ出かけ、帰路には昆布・魚肥・木材等を積み、旧暦の9~10月に伏木浦へ帰り航海を終了した。北前船は、江戸と大阪間を直行で往復する菱垣廻船や樽廻船と異なり、行く先々で荷物を売買しつつ航海する買積船であった。乗組員は、船頭、知工、表、親父(親仁)、水主、炊などで、船頭のうち、船主に雇用される者を沖船頭、船首を兼ねる者を直船頭といった。

博物館1階に展示中の船絵馬は、石川県富来町福浦金刀比羅宮蔵のもので、遭難して帆柱まで失った伏木の船が、加賀本吉の船に曳き船される状況が描かれている。千石船の楫は長さ9.4mと巨大で、水中に没していないため、船が横波を受けたとき最初に割れるという弱点をもち、楫を失った船は漂流を余儀なくされた。元治元年(1864)の入津手続の文書からわかるように、近世当時の日常生活に必要な物品のほとんどが、船で運ばれ、その物流は不可欠のもので、危険があっても航海を続けた。

寛永16年(1639)前田利常は200~300石積みの船で、藩米を初めて下関経由で大阪へ送った。これが加賀藩の大坂廻米の始まりで、以前は、伏木一能登半島~敦賀まで船、敦賀から琵琶湖岸の塙津まで牛・馬で山越え、塙津と大津間は船、大津からは陸送であった。寛文12年(1692)河村瑞軒が、東北・北陸地方から下関・瀬戸内経由で大阪へ赴く西廻り航路を開いた結果、敦賀・塙津・大津経由での米100石の運賃22石3斗8升が19石になった。

日本海沿岸地方では、冬の激浪のため、秋に収穫した米を、正月がすぎ、全国から米が集まり安値になる時期まで大阪へ廻米できなかった。明治初年、伏木の廻船問屋、



藤井能三はこの問題の解決には西洋型船による輸送以外にはないと考え、当時の日本一の船会社 三菱の岩崎弥太郎に、伏木への西洋型船廻航を依頼した。この時、(1)航海安全のための公式燈台の建設(2)廻航船の積載量の半分以上の集荷の保障(3)積載量の半分以下の集荷は、能三が全運賃を負担すること、など3条件を突きつけられたが、能三はその条件を受けた。

北前船ばかりの伏木港に、明治8年(1875)西洋型商船の瓊浦丸と豊島丸が入港。しかも三菱側の危惧に反し、多くの荷物があったため、三菱では、明治11年に3隻もの西洋型商船を廻航してきた。このことは、それまで海上運漕を生業としてきた和船業者に失業の危機感を与え、一度に大量の米が移出される為米価が上昇し、人々の生活をおびやかした。そのため和船業者と貧しい人々たちが一緒になり、能三の店と私宅が三日三晩襲われた。

けれども能三は、西洋型船の廻航により米が高値で売れ、運賃も安く、農家に利益があると信じていた。三菱の船より運賃を安くしようと、地元資本で北陸通船会社や、越中風帆船会社を設立。さらに浜沢榮一や三井と岡リ共同運輸会社を設立し、海運界を独占している三菱と激しく競争した。しかし三菱が共同側の株式を買い占め、共同運輸が三菱に合併される形で、日本郵船会社ができた。しかも能三はそこから退けられ、事業に失敗もし財産を失い、力を発揮できなかった。けれども伏木の人々は積極的に援助し、再起した能三は、総理大臣や同等のクラスの人々を伏木港に招き、港の重要性を説き、政府に陳情書を出すなど、港の整備に尽した。

明治時代の富山県の港は、能三によって近代化の道を歩き始めた伏木港だけであった。伏木港をよくすることは富山県をよくすることに結びつき、県内各界の応援を得て、伏木港は明治22年に5品目の特別輸出港に、明治27年には特別貿易港に、そして明治32年、ついに開港場に指定され、本格的な港として位置づけられた。

明治29年、庄川の大洪水は、千保川に流れ込み、中島町で水深6m。創設もない高岡紡績会社の倉庫が屋根つきで伏木に流され、射水平野一帯に被害があった。庄川河道改修期成同盟会が結成され、伏木築港期成同盟会と手を結び、政府へ働きかけた。その結果、庄川河道改修工事が内務省の直轄工事として認可され、日露戦争で中断したものの、明治45年完了。現在の新庄川の河道ができた。付帯工事の伏木築港の工事も完成した。伏木港は、日本海側では、新潟よりも敦賀よりも早く、3000t級の汽船が2隻、栈橋に接岸できる近代港湾になった。

さて近世以来の川舟運送では、「濡れ米」が米の商品価値を下げた。そこで川舟で砺波平野産の米を濡らさず、安全に、早く伏木港まで運ぶための鉄道敷設を考えたのは、砺波在の大矢四郎兵衛であった。明治30年大矢の努力で富山県最初の鉄道、中越鉄道(現JR城端線)が生まれ、同33年中越鉄道は伏木まで延長された。

一方、明治41年、富山県最初の化学工場である北陸人造肥料会社(のちの日産化学)が知事の肝入りで、県内地主が出資した半官半民的な性格で、伏木に設置された。原料

の海外依存が、伏木経由となるきめ手となった。

大正期の初め、富山電燈会社の金岡又左衛門社長は、神通川上流に庵谷第二発電所の建設を企画していた。金岡は、浅野総一郎に相談し、新設発電所の電力消費に大工場の誘致を依頼した。その結果、伏木港右岸に進出してきたのが電気製鉄(現NKK=日本钢管富山電気製鉄所)である。誘致できたのは、当時の京浜地方で1kw2銭5厘であった電力料金を、金岡が1kw5厘5毛で20年間値上げなしという条件で承知したからである。富山県は電気が安いとの評判から、北海電化(現日本重化学工業)・北海曹達(現東亜合成)・北海工業(現日本製紙)・伏木製紙などの工場が次々に進出し、伏木港を中心に臨海重化学工業地帯が成立した。これが富山県における第1次工業勃興期で、大正10年、富山県では、工業生産額が初めて農業生産額を追い越した。

伏木では昔から、男も女も港で働いた。女人も100kgの荷をかつぎ、家族全員が働き家の収入も多かったため、工場労働者は多くなかった。しぜん県内農村部の2・3男で、これまで出稼ぎに出た人々が、家族と伏木へ転入し、工場労働者となった。また通勤してくる人も多くなり、農業しながら工場へ働きにいく「緑の中の工業県」という、現在の富山県の基本の形が生れてきた。

伏木臨海工業地帯の成立で、中越鉄道の輸送量が急増したが、中越鉄道が私鉄で、手持ちの貨車台数が少なく滞貨が生じた。そこで中越鉄道を官営化し、海陸一体の輸送態勢造りが緊急課題となり、全県的に推進された。大正9年、中越鉄道の官営移管が実現。同11年、伏木駅の貨物取扱高は、名古屋鉄道管理局内で第2位になった。

明治19年の伏木港荷役内容円グラフでは、輸出物品の79%が米、輸入物品の56%が海産物(魚肥)である。明治35年から昭和28年の取扱貨物荷役高の折線グラフでは、大正6年から9年のころ、カープが急に上向く。伏木工業地帯成立の繁栄であろうが、昭和初期になると大不況のあおりで、カープが急下降する。その後、日本が大陸への侵略を推進し、満州国を建国する頃から、カープは再び急上昇。カープが下降し、日本の国力が落ち始めた頃に太平洋戦争を起こしている。

伏木工業地帯が生れるにつれ、伏木港では港の拡張が緊急課題になった。大正10年、伏木港拡築期成同盟が結成され、同15年に拡築工事が始まった。この工事は昭和11年に完成したが、翌12年には、早くも年間貨物取扱高150万tを突破し、昭和15年には186万tに達し、新潟港の荷役高を追い越した。そこで第3期の拡築工事が計画されたが、一部着工しただけで結局は実を結ばなかった。太平洋戦争の勃発が工事の推進をはばんだのである。昭和10年代の荷役高186万tという日本海時代は、日本が中国や朝鮮半島を侵略していた時代の反映であった。

(高岡市文化財審議委員)

※この講座は、博物館研究展示

「伏木資料展」に関連して開催

## 博物館特別講座 要旨収録

### 日本における浄土教系の仏教美術について —大乗寺の仏像・仏画を通して—

平成6年11月5日 実施  
講師 飛鳥 寛栗先生

放生津は古来より良い船着場として各地からの船の往来が盛んで、人や文物の集散に賑わった土地である。今も数多くの美術品を収蔵する大乗寺は規模の大きな寺であったが、その土地故栄えた寺であった。

浄土教系の仏教美術は、I 浄土変相図、II 来迎図、III 地獄変相図、IV 二河白道図、V 絵伝巻本、VI 弥陀・觀音・地藏・不動明王等諸尊像、仏具、建築、庭園等に特色が見られる。

浄土教系絵画で見てゆくと、弥陀仏を中心に、浄土変相図と地獄変相図とが関連し合い、二河白道図が生まれ、そして祖師方の伝記を描いた絵巻が生まれた。

先ず浄土変相図である。変相とは経文を絵画化したものという。浄土変相図には阿弥陀浄土変相と觀經変相がある。阿弥陀浄土変相は無量寿経と阿弥陀経の文意により浄土の様相を描き、觀無量寿経の説話を書いたものが觀經変相である。大乗寺の変相図は觀經変相である。

法隆寺金堂壁画の西面には弥陀浄土が描かれてあるが、これは浄土変相図による三尊像で、1400年前の建築物に中国様式の伝来として描かれたものである。

中国仏教には顯教系と密教系の流れがあり、顯教系からは早くより浄土変相が生れている。密教系では曼荼羅として現われる。

因に、曼荼羅は、大きくて、大日經に依る両界曼荼羅、これは正統系とされるが、これに対する雜曼荼羅との二つに分けられる。天台系・淨土系でいう雜曼荼羅は絵画的で、沢山の仏菩薩や家屋、池泉、草木等が描かれ楽しい。両界曼荼羅は仏像と梵字等で密教の宇宙観を図示してあって一般には難解である。

曼荼羅で呼ばれるものがもう一種類ある。大曼荼羅といい、日蓮宗の本尊のことである。中央に南無妙法蓮華経と、俗に文字がハネ上っているためヒゲ題目と云われている題目が書かれていて、周囲に多くの仏・菩薩・日本の神々の名も書かれている文字のみによる曼荼羅様式の御本尊である。日蓮上人が板に書かれたので板曼荼羅とも云われている。

さて、觀經曼荼羅を詳しく述べると、以下は変相図のことを曼荼羅と述べてゆくが、曼荼羅には右、下、左に細画が描かれていて、右上より下行し下左へと觀てゆく。觀經曼荼羅には序分義曼荼羅と十六觀曼荼羅がある。

序分義には觀經序文に出て来るインドの実話により、父王を殺害した阿閻世と母后希提希夫人の苦惱に因む経説が描かれており、十六觀には觀經正宗文に出て来る、心乱れた希提希には先ず心を鎮める方法として教えられる第一日想觀（西に沈む太陽を觀想する方法）より順次



説法され第十六觀へと導かれることが描かれている。大乗寺の変相図はこの十六觀曼荼羅である。

浄土曼荼羅は、織物による国宝 織織当麻曼荼羅系と元興寺智光が感得したと伝える印相の智光系と、平安期の青海感得と伝える技を尽した華麗な繪地金泥青海曼荼羅系に分けられる。

日本独特の絵図に來迎図がある。恵心僧都に始まるしさとされ、臨終の人を浄土へ迎える弥陀像が空中に画かれる。初期の來迎図は中央の阿弥陀仏を二十五菩薩が囲み雲に乗って來迎される。それが三尊のみ、或は二十五菩薩以外の諸菩薩と共にもの、早引來迎とて矢の様に下りて来る雲に乗る來迎仏、糸引來迎と云う阿弥陀仏の差し延す左手より糸が垂れて臨終の人に握らせるもの等、時代と信心相によって多種多様の來迎図が創作された。又、日本独特の日想觀から生れたと考えられる山越の來迎図の諸種もある。大乗寺には、三尊米迎図、山越三尊図、菩薩像がある。

浄土に対しての地獄変相図もある。平安朝の源信の著「往生要集」には多種多様の地獄相が書かれてある。どの様な因でどの地獄に墮ちるか示されてある。他の宗教にない仏教独特の世界である。ダンテの「地獄篇」にもこの様な地獄は書かれていない。大乗寺には八熱地獄圖が有る。八寒地獄という地獄もある。又、大乗寺には、地獄の閻魔大王を含む十王圖が揃っている。これは中国で作られた十王經により描かれたものだが、十王揃っているのは珍しい。

立山曼荼羅にも地獄が描かれている。地獄谷である。古来の修行者達がどの様な仏道修行をこの立山の大自然の中でしたかが、立山登山すれば解る。かつて立山は自然観照と仏教修得を体験する修行道場であった。今日はバスで日帰りする観光地でごみを捨て汚す乱雑な遊び場にすぎない。昔の人は悟りを求めて修行する為、六根清淨を称えて登った自然界であった。だから地獄谷、弥陀が原、浄土山がある。大自然の中にそうした世界を見ていた所に、古代日本人の精神世界、心象世界があった。人間の実相をどのように観てどのように救いを求めたかが、地獄・極楽變相として描かれ、その救済への強い願望が浄土教の中の変相図を生んだ。

それがさらに凝縮されたものが二河白道図であろう。中国の善導大師の著「散善義」は、觀無量寿経に関する論述であるが、そのなかに二河白道圖が説かれている。図は真中に白く細い道が画かれ、右に火の川、左に波の逆巻く水の川、逃げまどう旅人の後方に群賊悪獸が襲い

からんとしていて、教えを勧める釈迦如来に対し招き喚びかける阿弥陀仏が彼岸淨土に描かれている。弥陀の凡夫救済の願心を示す説話図で浄土教特有の美術作品である。

類形のものは他宗派にもあるが、日本独特の作品形式である絵巻祖師伝記が数多くある。高野山地蔵院蔵の高野山大師行状図が最も古く12世紀の作と伝えられる。融通念仏縁起絵巻、国宝一遍上人繪伝12巻、鎌倉時代の作 重文 善信聖人（親鸞）絵巻2巻、国宝法然上人繪伝48巻知恩院蔵等と数多くある。なお巻本繪伝を掛軸仕立てにした御繪伝軸は一般參詣者への絵説き用として数多く製作された。大乗寺には法然上人御繪伝12幅がある。

多彩な浄土教系美術の源流は末法思想であるが、末法思想は早く支那北齊期より仏教界に現われ、唐の普導・道綽等の念佛往生思想と共に日本の明惠・源信に受け継がれた。末法灯明記（伝最燈作一偽作）の与えた影響

も大きく、当時の変転極まりなき亂世の世相と相待って、欣求淨土思想が盛んとなり多様な絵画等を生んだ。

それが、法然・親鸞の時代になると、弥陀一仏帰依の教義から一転して単純化する。礼拝も弥陀一仏を本尊とし諸仏菩薩は姿を消してゆく。例えば二河白道図の弥陀釈迦三尊像が弥陀釈迦二尊図になり、平成業成の教義から来迎図は全て消えてゆく。この様にして、信心一つ、聞信の一念という弥陀一仏への帰依は、集と捨の創作世界を明確にし、美術作品の方向をも大きく変えたのであった。

（元高岡市文化財審議委員）

※この講座は、博物館特別展示  
「大乗寺の文化財」に関連して開催

## 平成6年度 展示一覧

### (1) 収蔵品展 民俗資料にみる人々の暮らし

4月8日（金）～6月26日（日）

日々の暮らしのなかで祖先から繰り返し伝えられてきた生活用具類は、必要から生まれ、工夫や改善が繰り返されてきた。古来より伝えられている用具類は、長い暮らしの推移を理解するためにも欠くことのできない貴重な文化遺産といえる。本展では、当館収蔵の民俗資料のなかより、衣食住・交通・交易・社会生活に関する用具135点を展示し明日の暮らしを考える機会を得た。

（入館者数5,673人）

### (2) 研究展示 伏木資料展

8月5日（金）～9月25日（日）

小矢部川の河口に位置する伏木は、江戸期の北前船の寄港地。明治期の海上交通手段の変化や、陸上交通の発達により港周辺の臨海工業地帯も形成され、こんにちでは日本海沿岸有数の近代港となった。本展では伏木浦から近代港への発展経過を調査し廻船・交易・築港・通商などに関する遺品資料や写真・文献など約200点を展示し環日本海貿易伏木を展望。

（入館者数4,061人）



伏木移民通り（湊町） 明治末

### (3) 特別展 大乗寺の文化財 —越中古寺の至宝—

10月6日（木）～12月18日（日）

新潟市立町にある大乗寺は、浄土宗の名刹である。創建は詳らかではなく、平安時代と伝えられ最初は長徳寺と云う天台宗であった。鎌倉期に浄土宗となる。本展では、同寺に伝わる新潟市指定文化財「御名号本尊」「阿弥陀如来立像」をはじめ、平安・鎌倉期の仏像や「浄土曼荼羅」など仏画や書跡、法具など70余点を一堂に展示公開した。

（入館者数 7,039人）



### (4) 収蔵品展 歴史・考古資料にみる郷土のあゆみ

平成7年1月10日（火）～3月23日（木）

高岡の人々の営みの歴史は、はるか一万数千年前であるが、高岡まちの誕生は、近世期の慶長14年（1609）前田利長公の関野の地への築城にはじまる。数年で廢城となるが加賀藩三代利常公の尽力により、改めて商工業の町として発展した。高岡の歴史に関する当館収蔵の利長文書、祭礼絵図、桜谷古墳出土品など考古資料も含め約110点展示した。

# 今年のおもな展示計画

当市立博物館では郷土の歴史・民俗・産業などに関する資料を展示し、特別展及び企画展を系統的に開催していますが、親しみやすく、内容豊かな展示活動の実現を期しています。

## ◆企画展

### 「絵図にみる観光名所」—吉田初三郎の世界—

4月8日（土）～6月18日（日）

吉田初三郎は、京都に生れ（明治17～昭30）大正初期から昭和10年代にかけて、観光社を設立し、国有鉄道の旅行案内書やパンフレットなど、国内はもとより海外まで鳥瞰図法で描いている。

実風景とは違うある一点の高所から俯瞰して描いた絵図による空間など、見る人の想像を豊かにするものです。

本展では、国内外に及ぶ初三郎の鳥瞰図を中心に、絵ハガキ・原画など70余点を展示紹介します。



吉田初三郎 鳥瞰図

### ◆企画展 「おもちゃの今・昔」

7月5日（水）～9月24日（日）

いつの時代でも、世相はすぐ子供の遊びや玩具に反映し、逆に流行の遊びや玩具がひとつの社会現象となることがあります。

本展では、各種の玩具の分類とうつりかわり、また、それぞれの玩具が生まれた時代背景などを調査研究し、郷土玩具・縁日玩具・流行玩具など約200点の展示を通じて遊びの文化を考えます。



### ◆特別展 「安曇寺の文化財」—越中古寺の至宝—

10月10日（火・祝）～12月17日（日）

福野町安曇にある安曇寺は、真言宗の名刹です。奈良時代頃、インドからの渡来僧により福野の安曇の地に開山されました。聖武天皇の命をうけ、大僧正・行基が伽藍24宇の坊舎を建立しました。その後、戦国の争乱により荒廃しますが、近世に前田家の祈願所として栄え、加賀藩が觀音堂、仁王門、寺領（山林）を寄進し、今日に至っています。

本展では、同寺に伝わる県指定文化財の「絵馬」「聖觀音像」をはじめとする仏画・仏像・法具などの法寶物・古文書・資料などを一堂に展示公開します。



木造聖觀世音菩薩立像

### ◆企画展 マイ・コレクション「家庭電化の移り変り」

平成8年1月15日（月・祝）～3月20日（水・祝）

ひとは誰でも、モノを集める習性を持っている。愛着があり捨てきれない日用品から高価な骨董品など実に多種多様である。

本展は、生活に身近な電気器具類の個人コレクションを一堂に展観して、家庭における電化生活の推移を紹介し、電力依存の今日の暮らしを振り返ります。



### 郷土の歴史資料などの 情報を求めています。

歴史や生活資料は、社会の変遷や興亡の足跡を理解するうえでの貴重な文化遺産です。当博物館では、古文書・絵図・その他資料などの収集を行い、企画展として皆様に見ていただく機会といたしましたく、情報がありましたら、是非ご提供をお願い致します。